



発行  
 群馬大学工学部広報室  
 桐生市天神町一丁目5-1  
 郵便番号 376-8515  
 電話：0277(30)1011  
 FAX：0277(30)1020  
<http://www.tech.gunma-u.ac.jp>  
 E-mail: kouhou@jimugunma-u.ac.jp  
 編集責任者：山本隆夫 編集担当者：石井圭一

◆紙面紹介◆

2面 縄文土器の文化財科学教室/サイエンスカフェ in 群馬/群馬アナログカレッジ/米ワシントン大学教授来学  
 3面 受賞紹介  
 4面 受賞紹介

投稿歓迎

本紙を工学部の“意見交流の場”とするため、教職員、学生、そして多くの皆さんから記事はもちろん、写真・マンガ・挿絵等広く投稿を歓迎します。

物業は壊滅状態となりまし  
 た。終戦後、輸出向けの商品で戦後復興に大きな貢献をすることなどにより、「織物の街 桐生」として復活しました。そして現在はファッション産業の素材発信基地として天神町にキャンパスが設けられ、初代の大竹校長およびその後の西田校長によって本学の基盤が確立されました。『本校の教育方針は人格錬磨第一主義であります。体

贈る言葉

以上のように、本学は産学官連携によって設立され、また、人間性を重視した教育を行ってきた学校です。諸君は、今、本学を卒業、修了するわけですが、諸君と大学とのつながりはまさにこれからが本番です。仕事や社会生活の中でさまざまな困難に出合うかもしれ

このように桐生の織物の歴史の中で、群馬大学工学部は育、知育はこれに次ぐもので大正四年に官立桐生高等染織学校として誕生しました。明治四十四年から学校設立の動きが始まり、県からの予て国家につくせたいと念じております。従って、本校の教育法は他の諸校とちがって人物の誘導に特に濃厚な味をみせておりますことを明言します。真に今の世は知識を備えた機械の人間よりは、かつて英国の大学教育に現れたような高潔な紳士の養成教育を学校教員月給が一〇二〇円

母校の力を活用してください。本工学部の研究開発の実力も、産業界の中での人的交流の広さも、諸君の想像以上のものを有しています。工学部の同窓会の支部は日本中にありますし、海外にもあります。教職員との繋がりが、卒業生との繋がりが、在校生との繋がりが、町の人との繋がりが、人と人との繋がりを大切にしてください。

贈ることば

桐生から世界への旅立ち

工学研究科長 工学部長 宝田恭之



卒業、修了おめでとう。これまで、自由な日本社会の中で豊かな生活を享受してきました。このような社会は、先人たちが血のしむような



最後に、現在、企業倫理や工学倫理が問われるような多くの事が発生していますが、諸君には建学の精神に立ち戻り、ぜひとも、信頼されるエンジニアとして活躍していただきたいと思えます。群馬大学工学部では、積極性、創造力、責任感の三つのSが重要であるとされてきましたが、私はここに、もう一つのSを付け加えさせて頂き、『積極性、創造力、責任感、そして信頼感』を諸君への贈る言葉とします。

贈ることば

卒業、修了おめでとう。これまで、自由な日本社会の中で豊かな生活を享受してきました。このような社会は、先人たちが血のしむような

努力をして築き上げたものであり、真剣な取り組みが必要になっていきます。このような中で、皆さんへ

一、若いときに自分を磨く

皆さんは本当に良い時代に

二、世界のどこへ出ても通用する人材になろう

今や国境を越えた国際的な

三、日本と世界の将来を考えよう

最近、少子高齢化が社会問題になってきています。皆さんが高齢になったときは、おそらく七十歳まで働かねばならない時代になっているでしょう。この問題は、人間がモラルを持ち、知恵を働かすことで十分解決できると考えられます。もっと大きな問題は、温暖化や環境汚染のような地球規模での環境問題や石油など天然資源の枯渇であり、そ

これからの活躍に期待

副研究科長 鶴飼恵 三二

生まれ、育ちました。自分のため、社会のため、仕事、勉強、生活のいすれにおいても失敗を恐れず、常にチャレ

の期待をいくつか記して、はなむけの言葉とします。

これに起因する経済の縮小化であると思われ。皆さんはこれらの深刻な問題に真正面から取り組みねばならない中心世代になります。皆さんが先頭に立って、これらの問題の解決のためにチャレンジャーとしてください。

一度しかない人生です。すべてを大いに楽しみ、充実した毎日を通してください。皆さんの活躍を期待しています。最近読んだ本で、『朝令暮改の発想』（鈴木敏文著、新潮社）があります。社会人向けの心構えが、満載です。ぜひ一読してください。

卒業・修了おめでとう



皆さん卒業、修了おめでとう。これまで、自由な日本社会の中で豊かな生活を享受してきました。このような社会は、先人たちが血のしむような

努力をして築き上げたものであり、真剣な取り組みが必要になっていきます。このような中で、皆さんへ

一、若いときに自分を磨く

皆さんは本当に良い時代に

二、世界のどこへ出ても通用する人材になろう

今や国境を越えた国際的な

三、日本と世界の将来を考えよう

最近、少子高齢化が社会問題になってきています。皆さんが高齢になったときは、おそらく七十歳まで働かねばならない時代になっているでしょう。この問題は、人間がモラルを持ち、知恵を働かすことで十分解決できると考えられます。もっと大きな問題は、温暖化や環境汚染のような地球規模での環境問題や石油など天然資源の枯渇であり、そ

これからの活躍に期待

副研究科長 鶴飼恵 三二

生まれ、育ちました。自分のため、社会のため、仕事、勉強、生活のいすれにおいても失敗を恐れず、常にチャレ

の期待をいくつか記して、はなむけの言葉とします。

これに起因する経済の縮小化であると思われ。皆さんはこれらの深刻な問題に真正面から取り組みねばならない中心世代になります。皆さんが先頭に立って、これらの問題の解決のためにチャレンジャーとしてください。

一度しかない人生です。すべてを大いに楽しみ、充実した毎日を通してください。皆さんの活躍を期待しています。最近読んだ本で、『朝令暮改の発想』（鈴木敏文著、新潮社）があります。社会人向けの心構えが、満載です。ぜひ一読してください。





昨年十二月一日～一月十三日の期間の六日間にわたり、みどり市笠懸東小学校生徒六人を対象とした「縄文土器の文化財科学教室」を、工学部と岩宿博物館を会場に実施した。

# 研究活動を体験

平成19年度  
地域貢献事業

## 縄文土器の文化 財科学教室開く

工学部のある東毛地区では、旧石器時代の代表的遺跡である岩宿遺跡が有名であるが、縄文時代の遺跡も多数散在している。また、本格的に縄文土器を再現製作した人が桐生の人であることも相まって、東毛地区の小学校の総合学習に縄文土器作りが頻りに取り上げられている。

他方、当研究室では縄文土器材料について材料力学の観点から研究を行っている。具体的には、縄文土器材料の強度(強さ)および靱性(粘り強さ)などを調べ、縄文土器から弥生土器への変遷理由等を材料科学の視点から明らかにしようとしている。

本教室はこれらの点に鑑み、現在本学で行っている小

中学生でも馴染みやすいと考えられる文化財科学の最先端研究を東毛地区の小中学生に体験してもらい、参加した生徒の科学分野に対する興味を育てることを目標として企画した。

一日目、縄文土器を作るための素地土作成。二日目、材料試験片および縄文土器作り。三日目、試験片および土器の野焼き。四日目、強度・靱性試験、データ整理およびその結果の検討。五日目、成果報告用資料作成および発表リハーサル。のスケジュールで行い、最終日の六日目には、岩宿博物館で学校関係者や保護者の方の前で、生徒たち自らによる成果報告が行われた。成果報告会の最後に、松

## 群馬アナログカレッジ 盛況のうちに開催

先端アナログ回路は、携帯電話で受けた微弱な電波を増幅し検波してデジタル信号を再現する部分、先端医療機器で生体から得た雑音の含まれた信号を忠実に再現してコンピュータ内で処理できるようにする部分など、電子システムと自然界とのインターフェース部分に使われるが、これらには、携帯無線機器の特性を大幅に改善したり、今まで得られなかったような生体画像を得るなど、高度デジタルシステムを実現する上でのキーテクノロジーと位置づけられている。

しかしこのアナログ回路はさまざまな雑音の影響を受けやすく、また精度や安定性を確保するためには、解決すべき課題が多かったり、特殊な回路技術が必要になるなど、研究開発には半導体デバイス、電磁気学、電子回路、信号処理、応用技術など多岐にわたる総合的な知識とその融合が求められる。この分野の技術者を育てるには十年もの歳月がかかるとも言われている。

このため電気機器メーカーはもとより電子技術の重要性が増している自動車や機械メーカーまでもが、製品の差別化技術としての先端アナログ回路の研究開発と人材育成に力を入れている。

「群馬アナログカレッジ」は、平成十七・十八年度の経済産業省「製造中核人材育成事業」の補助を受けて群馬大学で開発したカリキュラムを用いて、群馬県と群馬大学が共同で実施する産業界のためのリカレント教育事業である。大学教員と産業界、産業界OB講師とが密接に連携するカリキュラム構成、実習中心の実践的教育などを特徴としている。



本年度は、アナログ先端技術講座(実習を重視した中・上級講座)四講座、アナログ学形式の初級講座、四講座を開講した。アナログ先端技術講座は、「アナログシステム回路講座」、「アナログ集積回路講座」、「高周波回路講座」、「パワーエレクトロニクス回路講座」の四講座で、各講座六十時間、実習が全体の約六〇％を占め、金・土曜の開講が中心で、七月六日より十二月一日まで計三十八日間開講した。受講生を参加させた企業は三十七社、受講者は六十八人定員であった。全受講者の七〇～七五％が「講座修了後に理解が進んだ」との回答があり、また講座内容が上司同僚に推奨したい内容であった(最大八七％)など高い評価を得た。

一方、アナログ講座は、受講生の利便を考慮して桐生市民文化会館、群馬県立産業技術センターなどを会場に計七日間開講した。受講生を参加させた企業は九十三社、受講生は計二百七十三人であり、講義内容が自社の業務に直結している(九三・九六％)など高い評価を得た。また受講生のうち約三分の一が東京近郊、遠くは関西地区から参加した受講生もいるなど受講生に地域的な広がりが見られた。

講座内容について、中核人材育成事業全十五事業の中で特色事例十二例の一つに選ばれており、平成二十年度も「群馬アナログカレッジ」を同規模で実施する予定である。最後に紙面を借りて本年度の実施に際して支援していただいた関係各位に厚くお礼を申し上げます。

(電気電子工学専攻 山越芳樹)

# やさしい宇宙旅行のおはなし

## 平成19年度群馬大学公開講座 サイエンスカフェ in 群馬(第1回)

大学、とりわけ工学部で行われている科学技術に関する教育や研究は、現代社会の基盤を支えているにもかかわらず、一般に難解で近寄りがたいと思われがちだ。そこで、サイエンスカフェin群馬は、リラックスした雰囲気の中でお茶を飲みながら、工学部教員の行っている教育や研究に関連した興味ある話を、気軽に聴いていただくのが目的で企画した。

第一回目は、昨年十月七日(日)に桐生市本町二丁目の喫茶有鄰で「やさしい宇宙旅行のおはなし」と題して、副学長の白井先生が講師となつて開催した。

白井先生は、宇宙開発の歴史、最近の動向や実際に宇宙旅行をしたらどういことが起こりうるのかといった話を写真等を交えて分かりやすく



当日の受講者は十六人で、その過半が女性だった。また、講座後に実施したアンケートには、分かりやすかった、面白かった等の概ね好評な意見が寄せられた。

これらのことから、サイエンスカフェin群馬の実施責任者としては開催目的が達成されたものと判断している。今後、工学部の地域連携推進室としてサ

説明  
当日の受講者は十六人で、その過半が女性だった。また、講座後に実施したアンケートには、分かりやすかった、面白かった等の概ね好評な意見が寄せられた。

## 米ワシントン大学 Ramulu 教授のご来学

材料力学を講義  
平成十九年九月九日から二十二日までの二週間、群馬大学科学技術振興会の外国人研究者招へい制度を利用して、米国シアトル市にあるワシントン大学工学部機械工学科 Ramulu 教授を招へいた。原 Ramulu 教授はインド出身で、インドの大学を卒業した後ワシントン大学に留学生として進学された。ワシントン大学では、Korayazgan 名誉教授の指導を受けて学位を取得され、今日に至っている。

工学部とは、Korayazgan 名誉教授の尽力により平成十八年六月に交流協定が締結されている。交流協定の双方の窓口は松原 Ramulu 教授である。ワシントン大学は日本ではあまり知名度が高くないが、自然科学分野でのノーベル賞受賞者が七人いる。日本人の自然科学



同大学のレベルの高さが分かることと思う。

本学科学技術振興会の外国人研究者招へいでは、滞在中に講義が講演の実施が義務づけられている。当方からは、ワシントン大学での「材料力学」の一回目の講義をお願いした。

Ramulu 教授の講義はその英語も含めて大変分かりやすく、私自身はほぼ理解ができた。講義の内容は日本のそれとは大きく異なり、今問題とされている「科学的応用力」を屈指しない学生には理解が難しいかもしれない。ちなみにワシントン大学では一単位につき、三～四時間の自習を学生に要求していることであった。

Ramulu 教授は過去に一日だけ日本に滞在した経験があるとのこと、今回が初めての本格的な日本滞在であった。日本人の学生に接して、「人なつこい笑みを浮かべ、物静かで、礼儀正しい」という、明治初期に日本人に初めて遭遇した外国人が持った日本人の印象をそのまま受けたようであり、今までにない印象的な外国滞在となったようであった。

(機械システム工学専攻 松原雅昭)



# 各分野で栄誉に輝く

## SAE Fellow 会員認定

### 本学3人目の取得

機械システム工学専攻 教授 小保方富夫



SAE International (国際自動車技術会) は機械システム工学専攻の小保方富夫教授をSAE Fellowに認定した。本学会は会員数九万人を超える機械系で最大の国際的な学会であり、Fellowには毎年新しく約二十人が認定され、一九七五年以来、故人を含めると六百八人がこの資格メンバーになっている。日本の大学関係者では十五人目であり、群馬大学関係者では、大学発足当時の熱及熱機講座(後の熱工学講座、現在のエネルギーシステム工学分野第二研究室)の浅沼強教授(東大名誉教授、エンジンの吸・排気管効果の解析など)、大学第一回卒業生の八木静夫博士(本田技術研究所社友、VTECエンジンの開発など)に続き三人目である。

本学資格は数名の推薦者による申請書に基づき、Fellow委員会から選出されるもので、Fellow資格は、研究、技術革新、創造的なりーダーシップを通して自動車技術の発展に顕著な影響を与えた個人の業績を認め、名誉を与えるものであり、小保方教授の長年の地道な努力が認められたものである。

### 講習会企画などを評価

原子力研究委員会貢献賞を受賞



機械システム工学専攻・松原雅昭教授は平成十九年に五十周年を迎えた社団法人溶接協会・原子力研究委員会より、同委員会運営に尽力した功績を評価され、原子力研究

測のバイオニア ②層流型流量計やLDA噴射率計などの計測器の開発 ③国際エネルギー機関、日本機械学会、日本学術振興会などを介したエンジニアの燃焼改善とエネルギーセキュリティに関する国際研究協力活動 ④JAB認定推進など日本の技術者教育改善への貢献、などが挙げられている。また、同時に小保方教授は日本機械学会創立百十周年記念式典において功労者表彰を受けられた。あわせて報告し、研究室一同ともに喜びを分かち合いたい。

委員貢献賞を受賞した。日本溶接協会は、溶接に関する技術の向上および普及を図るとともにわが国産業の健全な発展に寄与することを目的としており、昭和三十二年

### 2007年度炭素材料学会

#### 「炭素」論文賞を受賞

応用化学・生物化学専攻機能材料化学分野 准教授 白石 壮志

平成十九年十一月二十八日から三十日の三日間、別府市ビーコンプラザにて開催された第三十四回炭素材料学会年會において、本学の実用化学・生物化学専攻 機能材料化学分野の白石壮志准教授

が、二〇〇七年度論文賞を受賞した。

対象となった論文の題目は「炭素電解質界面における電気二重層容量の電解質イオン依存性」であり、学術雑誌「炭素」の二二九号にその論文が掲載されている。この論文では、多孔質炭素電極における電気二重層容量の、電解質イオンならびに電極材料依存性を調べた結果が報告されており、炭素ナノ細孔と電解液界面に形成される電気二重層の本質について考察されている。

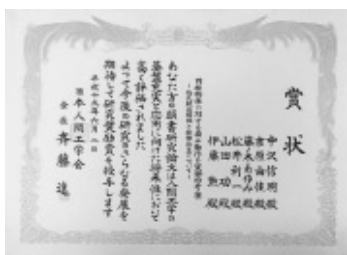
この論文で示された結果は、近年、注目されている大容量コンデンサ(電気二重層キャパシタ)の高性能化につながるものとして期待される。また、この論文の特徴は、著者が単名ということである。

白石准教授によると、これまで自ら行ってきた実験結果をまとめたものであり、考察した結果について自らが責任

### 平成19年度日本人間工学会

#### 研究奨励賞を受賞

生産システム工学専攻 准教授 中沢 信明



生産システム工学専攻中沢信明准教授の研究グループは、平成十九年度日本人間工学会研究奨励賞を受賞した。昨年六月二日の学会総会において表彰式が行われ、賞状および副賞が授与された。

同賞は、平成十八年度の学術論文誌「人間工学」に掲載された論文の中から、人間工学の基礎充実と応用に向けた将来性を高く評価されたものに与えられ、本年度は二件の受賞があった。そのうちの一件が、中沢准教授らの学術論文である。対象となった論文のタイトルは、「円柱物体に対する指先軌道特性の考察(指先軌道特性と接触位置について)」であり、昨年度、大学院生であった吉原由佳さん(現コニカミノルタオプト)と藤ノ木あゆみさん(現日産自動車)の修士論文の研究成果の一部をまとめ、投稿したものである。二人の修士生は、学部二年生の仮配属から同研究室に在籍しており、人間の

把持特性に深い興味を持ち、継続的に研究に取り組んできた。今回の受賞では、地道な特性解析からモデル化に至るまでの試行錯誤の繰り返し、が、実を結んだ形となった。対象となった論文において、人間が円柱物体を掴み保持する際の指先軌道特性について調べ、上肢の姿勢が円柱物体に対する指先接触位置に大きく依存していることを見出し、接触位置推定モデルの構築を行った。円柱物体は把持部分が無限に存在するが、本モデルでは精度よく人間の特性を近似できる。従来、ロボットフィンガによる接触位置の決定については、把持の安定性を中心に議論がなされていたが、本研究のように上肢の姿勢を考慮に入れたものは扱われてこなかった。さらに指先軌道について、二次のベジエ曲線による近似モデルを提案し、ロボットの動作計画への応用を視野に入れたモデル化が高く評価された。

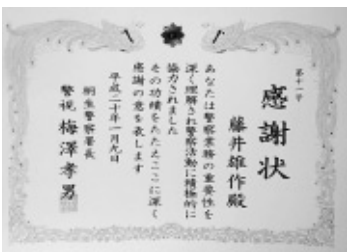
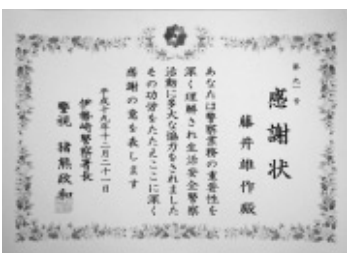
准教授、中川紳好教授を含む研究チームの成果である。本研究では、熱伝導の良好な流動層を用いることにより、メタンの部分酸化触媒として期待されるニッケル-水酸アパタイト複合触媒の合成過程の簡略化ならびに多孔質化を同時に実現。さらにこの触媒が低温での良好な還元活性がある事を示した。

### 伊勢崎・桐生両警察署長から感謝状受賞

電気電子工学専攻 教授 藤井 雄作

群馬大学工学部e自警ネットワーク研究会の藤井雄作教授が、昨年十二月に伊勢崎警察署長から、本年一月に桐生警察署長から、それぞれ感謝状を贈られた。これは藤井教授がe自警ネットワーク研究会会長として、地域の防犯に大きな貢献をしたことにより贈られたものである。

このコンセプトの普及を目指してさまざまな活動を行った。最近、防犯カメラの欠点であるプライバシー侵害の問題の解決を目指し、プライバシー保護機能付きの防犯カメラシステムを開発した。このシステムの活用のため、群馬県警本部、桐生警察署、伊勢崎警察署、桐生市、伊勢崎市を初めとする関係機関と協同で、桐生市末広町商店会と伊勢崎駅前駐輪場において検証実験を行った。これらの試みはNHKを初めとするマスコミに数多く紹介



された。藤井教授の今回の受賞は、同研究会の活動が社会的に高く評価された結果と喜んでいる。(群馬大学工学部e自警ネットワーク研究会 理事 太田直哉)

### IMPRES 国際会議

環境プロセス工学専攻 助教 中里 勉



Heat Pumps and Related Gas-Solid Technologies (IMPRES)において、環境プロセス工学専攻の中里勉助教がポスター発表優秀賞を受賞した。

受賞対象となった研究題目は「Oxidation of Methane by Nickel-Calcium Hydroxyapatite Composite Catalysts Prepared by Droplet Thermal Treatment by Fluidized Bed (流動層滴下熱処理により合成したニッケル水酸アパタイト複合触媒によるメタンの部分酸化)」であり、平成十八年度生物化学工学科卒の中島伸一郎君、平成十九年度生物化学工学専攻修士の坂本匠君、環境プロセス工学専攻の野田玲治

平成十九年十月二十八日から三十一日にかけて京都リサーチパークにて開催されたエネルギー関連の革新的材料に関する国際会議(化学工学会 International Symposium on Innovative Materials for Processes in Energy Systems - for Fuel Cells)で、藤井雄作教授の「環境プロセス工学専攻の中里勉助教がポスター発表優秀賞を受賞した。」という内容が掲載された。この賞は合計三十八件のポスター発表に対し、第一日十九件、第二日十九件をそれぞれ独立してIMPRES登録参加者が無記名で第一位、第二位、第三位を投票し、各位に重みが付けられ得点数の多い順に選出される賞の一つである。各日とも学生優秀賞二件、一般優秀賞二件、最優秀賞一件

なお、中里勉助教は本学の卒業生であり、平成二十年一月一日付で鹿児島大学工学部応用化学工学科に准教授として転出した。今後の活躍に期待したい。(環境プロセス工学専攻 広報委員)



第1回関東支部大会ポスター賞を受賞

島山泰斗君・攪上健二君・今野高志君 (応用化学専攻)

日本化学会関東支部(支部会員数約一万五千人)の第一回支部大会が九月下旬に首都大学東京・南大沢キャンパスで開催され、千人を超える参加者を集め成功裏に幕を閉じた。本学からも多くの教職員・学生が参加し、講演ならびにポスター発表を行った。

第17回日本MRS学術シンポジウム国際セッション奨励賞を受賞

生産工学専攻 博士後期課程3年 古澤和也君 (※受賞時2年)



平成十八年十二月八日(日)に日本大学で行われた第十七回日本MRS学術シンポジウムの国際セッションにおいて、生産工学専攻博士後期課程三年の古澤和也君が、優秀な発表をした若手研究者に贈られる奨励賞を受賞した。演題は「Adsorption kinetics of carcinogenic agents to DNA LCGBeads」。

いる。第一回大会同様に多数の参加者を得て、化学(物質・材料科学)の最先端分野の議論が深まればと期待している。

また上記ポスター賞に加え、博士後期課程学生に対する講演賞ならびに一般講演者に対する賞が用意されているので、多くの教職員・学生の積極的な参加をお願いしたい。(応用化学・生物化学専攻 西村 淳)

第30回日本バイオレオロジー学会奨励賞を受賞

生産工学専攻 博士後期課程3年 古澤和也君

平成十九年六月十四(土)〜十五日に北海道大学で行われた第三十回日本バイオレオロジー学会において、生産工学専攻博士後期課程三年の古澤和也君が、優秀な発表をした若手研究者に贈られる奨励賞を受賞した。演題は「濃厚DNA溶液の透析に関するレオロジック性質」である。透析は、人工透析を初めとして、医療や工業に広く応用されている手法である。最近

では山本隆夫教授、実験については横助手と若松研究員への指導と協力の下に行われたものである。(応用化学・生物化学専攻 土橋敏明)

群馬県警察本部から感謝状を受賞

大学院工学研究科電気電子工学専攻 櫻井亮輔君・杉田陽市君・藤井雄作教授

群馬大学工学部e自警ネットワーク研究会(www.e-net-work.com)では、最近、プライバシ保護機能付きの防犯カメラシステムを開発しました。県警本部、桐生警察署、伊勢崎警察署、桐生市、伊勢崎市、三國コカ・コーラボトリング株式会社をはじめとする関係機関と協働して、この次世代型防犯カメラシステムの実用化試験を、初めて桐生

晶形成過程を調べた。透析による物質輸送と、自己組織化による液晶形成の関連を、レオロジー、すなわち、物質の変形と流動性の観点から議論した。このDNA材料は、異方的な力学特性を持つだけでなく、DNAが発ガン物質を

吸着する特性があることによる物質輸送と、自己組織化による液晶形成の関連を、レオロジー、すなわち、物質の変形と流動性の観点から議論した。このDNA材料は、異方的な力学特性を持つだけでなく、DNAが発ガン物質を

のGIS(地理情報システム-Geographic Information Systems)の機能拡張に関する研究であり、同専攻の松本健作助教、小葉竹重機教授、清水義彦准教授および近藤良夫技術職員との連名で発表されたものである。



市末広町商店会で行っています。また、自動販売機への導入試験も、並行して行っています。さらに、伊勢崎駅前駐輪場においては、公共施設への実用化試験に取り組みんでいます。

機械学会関東支部ブロック講演会ヤングオーサー賞を受賞

機械システム工学専攻 修士1年 野村聡史君・藤掛 聡君



平成十九年九月二十一日(二)に埼玉大学にて開催された日本機械学会関東支部ブロック合同講演会(二〇〇七)さいたま/第三回埼玉ブロック大会で、機械システム工学専攻マテリアル第 講座修士一年の野村聡史君および藤掛聡君がヤングオーサーアワードを受賞した。この賞は、講演



会にて発表した若手研究者を対象に投票による選考で贈られる賞である。受賞タイトルはそれぞれ「加工法を用いたスマートストラクチャシステムにおける励振周波数選択手法の検討」・「複数切欠を有するオーステナイト系ステンレス鋼配管の崩壊強度」であり、同講座の岩崎准教授・松原教授との共同研究である。

土木学会年次学術講演会優秀講演者賞を受賞

社会環境デザイン工学専攻 土井俊彦君・今泉友之君

平成十九年九月二十二日から十四日までの三日間、広島大学で開催された第六十二回土木学会年次学術講演会において、社会環境デザイン工学専攻修士二年の土井俊彦君と修士一年の今泉友之君がそれぞれ優秀講演者賞を受賞した。同賞は同講演会において優れた研究発表を行った者に対して授与される。



土井俊彦君の受賞対象となった発表題目は、「超音波/電解併用型処理による可溶性汚泥の特性」であり、同専攻の渡邊智秀教授および伊藤可也講師との連名による成果発表である。

今回の発表では、メタン発酵性をひとつの指標として、下水処理に伴って年間約七千五百万トンの汚泥可溶化率なら

第37回結晶成長国内会議講演奨励賞を受賞

大学院応用化学・生物化学専攻 博士前期課程1年 黒岩高志君



昨年十一月五(日)に北海道大学で開催された第三十七回結晶成長国内会議で大学院応用化学・生物化学専攻博士前期課程一年の黒岩高志君が講演奨励賞を受賞した。この学会では百八件の一般講演があった。その中から若手研究

者に発表で優れた発表に対して二件の講演奨励賞が贈られた。黒岩君の発表題目は「光誘起結晶化におけるダイマーの役割」で、タンパク質の結晶化を光で誘起させる機構を解明する研究である。タンパク質の結晶化はタンパク質の構造解析に必須の工程であり、結晶化の新しいテクニックが望まれている背景から、評価されたと思われる。この研究は、奥津哲夫准教授および平塚浩士教授の指導・協力によって行った研究である。(応用化学・生物化学専攻 広報委員)

行事予定 INFORMATION 行事予定

平成20年	3月25日(火)	学位記授与式
	4月1日(火)・2日(水)	春期休業
	4月3日(木)・7日(月)	オリエンテーション
	4月4日(金)	入学式
	4月8日(火)	前期授業開始
	4月18日(金)	前期履修届提出

塚浩士教授の指導・協力によって行った研究である。(応用化学・生物化学専攻 広報委員)